

年に石坂実福の門人が建立しました。清原元輔は、「枕の草紙」を書いた、清少納言の父親です。

- ② 競技場改修記念碑 神社前の改修記念碑は、かつて梅林が下谷保青年団の陸上競技場であった頃のもので、昭和11（1936）年に建立。
- ③ 和魂漢才碑 梅林を入って左手の小高い所にあり、黒花崗岩の大きく立派なものです。菅公1075年大祭奉賀事業の1つとして、昭和52（1977）年に建立されました。和魂漢才の文字は、菅公の裔孫太宰府天満宮宮西高辻信貞氏の揮毫によるもので、五角形の台石には、菅公御遺戒が彫られています。
- ④ 林道人詩碑 梅林の中央手前にある詩碑で、上部に「詠菅廟梅」と題し、「東風二月廟前梅 恰似羅浮香謁堆 若就林間為醉臥 美人必入夢中来 孝林道人」の七言絶句、下部には、孝林道人の略歴と建碑理由が彫られている。林道人は南養寺22世 林碩慶です。安政5（1858）年頃に建立。
- ⑤ うたた句碑 不老軒^{うたた}軒の「空に香の満てや口（梅）に日の匂ふ」が彫られています。うたは郷地村（現拜島市）の人で、文化文政年間の戯作者。蜀山人と交遊あり俳句もよくしました。本名を宮崎伊八といい、嘉永6（1853）年94歳で没しました。
- ⑥ 原田重久句碑 梅林の奥に、原田重久の句碑「風落ちて青田の秩序戻りけり」があります。戦争で吹き荒れたあと、戦後田園が静けさを取り戻したことを詠ったものです。原田重久は明治34（1901）年 谷保村に生まれ、書家本田石庵（定寿）に漢籍書道を学びました。NHK専属放送作家として活躍。又郷土史家として『国立風土記』『わが町国立』を著し、昭和60（1985）年、84歳で没しました。この碑は生前1981年に山口瞳、関頑亭らが発起人となって建てました。

- ⑦ 山口瞳文学碑 毎年梅の咲く頃に、知人と宴を催した場所に、平成9（1997）年に関頑亭が世話人となり、関敏が制作しました。台座の地に根ざした不動の山と将来を見通せる窓としての目を表現しています。谷保天満宮の祭



図12 山口瞳文学碑

りを描写した『週刊新潮』に連載されたエッセイ「男性自身」の「祭り」の一節「金棒、拍子木、笛が鳴り、万燈を先頭にした獅子舞の道行は近づいてくる、体が天に浮く心地がする、夕方になって豪雨が襲う、神殿で神楽が続いている、あたりが暗くなる、太鼓と笛、ゆるやかに荘重に軽快に」が彫られています。（*17・P18）

- ⑧ 台臨記念碑 梅林の奥右手にあります。明治41(1908)年8月1日、有栖川宮威仁親王の呼びかけで、日本で初めてガソリン自動車(タクリー号)のドライブツアー「遠乗会」が日比谷公園から甲州街道の立川を目的地にして行われました。



図13 台臨記念碑

折り返し谷保天満宮で、交通安全を祈願して参拝された後、梅林で立食しました。その記念として親王の台臨記念碑を建てました。2008年8月1日、100周年にちなんで昼食会を再現しました。同年12月7日には遠乗り会を再現したクラシックカーのパレードが行われました。(*43)

- ⑨ 顕徳碑 梅林入口にある。府中商人組合谷保支部幹部の顕徳碑で、趣旨と芳名が彫られ、昭和11(1936)年の建立です。
- ⑩ 谷保天満宮の座牛 参道石段の下にある。菅公葬送のとき、悲しみ動かなくなった牛車の牛を現します。昭和48(1973)年関敏の作です。

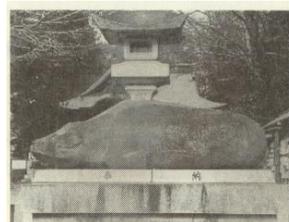


図14 座牛

- ⑪ 慰霊碑 社殿の右手斜面にあります。正面には「慰霊碑 本田定弘書」裏面には国立町の戦争犠牲者292名の名前と「人間がたがいに信じあい愛しあうこころの花束をつつしんでここにささげる」が彫られ、昭和31(1956)年の建立です。
- ⑫ 彰功碑 社務所に並んで建っています。正面には日露戦争における谷保村従軍者56名の彰功文が、本田定年の撰文と書で彫られています。篆額てんがくの「彰功」は乃木希典の書です。裏面には戦死者3名、病死者5名と凱旋者48名の氏名が彫られています。明治39(1906)年に建立。国立市内の戦争関係碑は、前記慰霊碑と二つです。
- ⑬ 菅公千年祭碑 彰功碑と並んで建っています。明治35(1902)年は、菅公が延喜3(903)年薨去こうきよされてから千年。その記念として建立されました。
- ⑭ 筆塚 谷保天満宮神社南側にあります。明治24(1891)年に谷保、青柳、四谷(現在は府中市)の小学生が、使い古した筆を納めて供養し、建立しました。1月25日道真公の命日(初天神)に、筆供養が行われます。道真公は平安時代、空海、小野道風と共に三筆といわれた能書家でした。

2. 清水の茶屋跡 (跡地 谷保5827-1)

谷保天満宮の近く、北西の方向、天神坂下に「清水の茶屋」という立場茶屋がありました。このあたりは、谷保随一の湧水池で、夏ともなると、そばやそうめんを清水にひたして、炎天下の甲州街道を旅する人々に大変珍重されたようです。



図 15 清水の茶屋跡 現況と「江戸名所図会」

一里ほど手前の府中の宿場を出ると日野宿まで二里八町（約8,600m）の途中で多摩川を渡ります。この間でお茶を飲めるところはここだけでした。明治末期まで営業を続けていました。当時の様子は『江戸名所図会』に描かれています。

3. 仮屋あと（谷保5814先）

建治元（1275）年、谷保天満宮に扁額^{#12}を奉納するため、勅使が京都から下向した際、仮の宿を設けたところからこのあたりを「かりやうえ」と呼び、南側の甲州街道の天神坂をおりきったところに出る、坂下と千丑の境の、坂道を「かりやざか（仮家坂）」と呼ぶようになったと言われています（江戸名所図会）。この額は、世尊寺流^{#14}の書道の祖世尊寺朝臣経朝書とあり、重要文化財に指定されています。（新編武蔵風土記稿巻乃九一）



図 16 かりやざか

4. 滝の院（谷保5217）

谷保天満宮の裏方、甲州街道坂下地域の北側にあります。天満宮の別当寺安楽寺の中六坊の一つで、もとは「滝本坊」といいました。2000年に堂が取り壊され、現在は無住寺となっています。墓地は千丑、坂下、下谷保各地区の世話人により管理されています。



図 17 滝の院

（血文の阿弥陀^{#25}）

滝の院にあった阿弥陀如来^{#26}座像は、法然上人および津戸三郎が守ゆかりの仏像との伝承で『新編武蔵風土記』や『武蔵名勝図会』などに記載されている「血文の阿弥陀」^{#4}で、現在は谷保天満宮に保管されています。これにまつわる石塔として「津戸三郎為守血文之阿弥陀」



図 18 血文の阿弥陀と石塔

如来法然上人作」と刻まれた石塔が建てられています。高さ1.5m、上部に小さく定印の阿弥陀如来座像が浮き彫りされています。

ほかに次の墓、塔があります。

- 1) 「谷保案内」を書いた、遠藤由晴^{#15)}の墓が、基地の中央、住職墓地の手前にあります。
- 2) 国立最古像塔 住職墓地の右側中央にある光背型の墓塔です。墓塔には、寛永19(1642)年と示寂年が彫られています。国立で最も古い造立と思われます。(示寂:菩薩または高僧の死)

5. 安楽寺 (跡地 谷保5812周辺 現存せず)

安楽寺は梅香山松寿院安楽寺と称され、天台宗深大寺の末寺^{#16)}でした。徳川時代には、ご朱印社領13石余り、社地900坪(約3,000㎡)でした。

(安楽寺六坊)

安楽寺六坊は、次の6つです。

尊住坊 第1小学校入口正面、三田氏の屋敷に六地藏がありました。

邑盛坊 石神宮のあと。庚申塚、馬頭観音などがありました。

梅本坊 坂下にあります。南北朝から室町中期頃までの板碑などがありました。

桜井坊 天神坂中段南側にあります。

滝本坊 現滝の院。谷保天満宮北側にあります。

松本坊 現府中市西府本宿に接続する「本宿原」の渡辺屋敷に地藏がありましたが、国道回収により滝の院に移しました。

(開山と場所)

「安楽寺記」等の寺伝記録によれば、菅原道武公が大宰府の安楽寺を模して寺を建立し、道真公の像を安置したことは始まり、天暦元(947)年に法円が開山したとされています。しかし、深大寺末寺西光寺の過去帳には、別記載がありその開山についての詳細は不明です。養和元(1181)年、津戸三郎為守が天満天神社を天神島から現在の地に遷座したときに、同時に別当寺として祭祀をつかさどるために社務六院(六坊)を置いて祝典その他を津戸三郎為守が統括しました。安楽寺は、滝の院の西方一丁、谷保天満宮に西北方一丁半の千丑坂下の中央部丘状に移したと伝えられています。また谷保天満宮境内常盤清水の傍らにあったともいわれています。

(本尊と阿弥陀^{#25)}如来像^{#26)})



図 19 安楽寺六坊配置図(関保寿家文書「撫梅」)より

津戸三郎為守は、建久6（1195）年に法然^{*17}上人のもとで出家しました。本尊は、京都黒谷の法然上人から贈られたと言われる高さ約45cm木造の阿弥陀如来像で、いわゆる津戸三郎為守の血文阿弥陀如来像です。

その後安楽寺は衰退の一路を辿りました。同時に六坊も一つ二つと消えていって、寛永の頃になると、四坊を残すのみとなりました。

（再興と火災） 禰宣

安楽寺が再興されたのは、この寛永年中のことです。当時の住僧は権大僧都圓和尚と言われました。僧圓戒は江戸小石川の人で、谷保にきて安楽寺の住職となりました。

「谷保案内」を書いた遠藤由晴は、この安楽寺住僧権僧都圓戒の一番弟子でした。

寛文・貞享の頃は、権僧都裕盛という人が住職となり共に安楽寺再興のために力をつくしました。

「江戸名所図会」などによるとその後江戸時代の火災で失われ再建されませんでした。

江戸の町に天満宮の出開帳^{#18}を行い、多くの信者を作ったのは安永年中のことで、この時の安楽寺住僧は慧澄和尚と言われました。

この頃六坊は滝本坊のみとなってしまいました。安楽寺には寺子屋が開かれていて、これが村の子弟の唯一の教育機関でもありました。

（神仏分離令による廃寺）

神仏分離令^{#19}により、明治元（1868）年9月に安楽寺最後の住僧秀影は還俗して津戸監物と名乗り、谷保天満宮の初代住僧となりました。安楽寺及び滝の院以外坊は、明治6（1873）年ごろ廃仏毀釈^{#20}により取り壊され、今は存在していません。安楽寺の本地堂も明治9（1876）年ごろに壊されて、安楽寺や本地堂の本尊などは滝の院に移されました。

語句の説明・解説 (*数字は、引用文献を示す)

- # 1 天満宮【てんまんぐう】 別に、天神社・老松社・北野神社などとも呼ぶ。天満天神菅原道真を祀る神社。延喜 5(905)年創建の太宰府天満宮,天暦元(947)年創建の北野天満宮をはじめ全国各地にあり,その数は1万をこえるといわれる。平安時代,道真の縁故地などに勧請され,天神信仰の広がりとともに各地に天満宮が創建・勧請された。(*12)
- # 2 菅原道真【すがわらのみちざね】 承和12年 - 延喜 3.2.25(845 - 903)年菅原是善^{これよし}の子。文章生から出身し宇多天皇の信任を得て,寛平 3(891)年蔵人頭,893年参議となり,896年娘の衍子が女御となる。昌泰 2(899)年醍醐天皇のもとで藤原時平が左大臣に,道真が右大臣となる。時平による藤原氏の権力確立の策略により,延喜元(901)年自らの娘を室に入れていた^{とぎよ}齊世親王(醍醐の弟)を天皇に即け醍醐天皇を廢する企てをしたとして大宰帥に左遷され,任地で没した。909年時平が没し,延長元(923)年皇太子保明親王が没すると,道真靈魂の宿忿によるとされ,右大臣に復し正二位を贈られた。925年時平の外孫皇太子慶頼王が没し,930年に内裏の落雷で大納言藤原清貫が死亡。これらは道真の怨霊の仕業と考えられ,天満大自在天神として安楽寺(太宰府天満宮)に祀られ,洛北の北野天満宮にも祀られた。正暦 4(993)年贈太政大臣。当代随一の文章道の学者として,900年詩文集「菅家文章」を醍醐天皇に献じ,大宰府でも「菅家後集」を撰する。「日本三代実録」編纂に携わり,「類聚国史」を自撰。天神は怨霊・雷神として怖れられる一方,和歌・書道・学問の神ともなり,禅僧にも渡唐天神として信仰された(天神信仰)。近世には民衆にも信仰され,浄瑠璃「菅原伝授手習鑑」も創られた。(*12)
- # 3 天神信仰【てんじんしんこう】 天満(大自在)天神として神格化された菅原道真に対する信仰。道真の没後間もなく,天変地異が相つぎ、御靈^{ごりょう}信仰の広がり背景に,その崇りと恐れられた。道真の霊は,雷神信仰とも結びつきながら神格化され,北野天満宮を中心に各地で祀られたが,神格は次第に変容をとげ,文道の祖神と崇められたほか,書道の神,極楽往生を擁護する神,至誠の神など多様な性格をもつに至り,広く信仰されて,各方面に多大な影響を及ぼした。(*12)
- # 4 津戸三郎為守【つのとさぶろうためもり】 1163~1243 鎌倉時代前期の武士,御家人。^{たかすえ}菅原孝標の孫津戸為光の子。石橋山の合戦の折に源頼朝の陣営に参加して力を得、谷保の城山へ館を構えたという。為守は農民たちが三朗伝説を語り伝えながら、篤く信仰していた天神社と別当寺の安楽寺を谷保の地へ遷座し、その宗教的權威によって、所領支配を確かにしようとしたのであろう。頼朝が東大寺供養に供奉(ぐぶ)して上洛した建久 6(1195)年に法然により帰依した。法名は尊願。熊谷直実とならんで源空(法然)の根本の弟子と称され、谷保に帰ってから、一心不乱に念仏修行を行った。仁治 3(1242)年 11月の如法念仏の結願日に割腹し翌寛元(1243)年に往生したという。孫は代々谷保天満宮の神官職をつとめている。墓は八王子大善寺にある。(*1)
- <血文阿弥陀如来像の伝聞>谷保天満宮安楽寺旧記によれば、法然上人が、為守の志をうけて阿弥陀の尊像を彫み、その胎内に、己の血を以って書いた所謂「血文」なるものを蔵すとある。また「法然上人行状伝記」には、尊願為守が、腹を切った血にて故郷の妻子に贈ったという血文については、伝聞には見当たらず、安楽寺に伝わる土俗の説には信をおくことができないと。と書かれている。(*3)
- # 5 中州【なかす】 川の中で、水面にでていて島状の地のこと。
- # 6 別当寺【べつとうじ】 神仏習合説に基づいて神社に設けられた神宮寺の一。(*11)
- # 7 県主【あがたぬし】 大和時代の県の支配者

- # 8 流造【ながれ - づくり】神社本殿の形式の一。切妻造平入りの屋根に反りを付し、その前流れを長くして向拝としたもの。平安前期より起り、賀茂御祖神社・賀茂別雷^{みおや わけいぬづち}神社の本殿の形式。全国に広く分布。(＊11)
- # 9 切妻屋根【きりづま - やね】棟を界として両方に流れを持つ、書物を半ば開いて伏せた形。(＊11)
- # 10 入母屋【いりもや】上部は切妻のように2方へ勾配を有し、下部は寄棟造のように4方へ勾配を有する屋根形。(＊11)
- # 11 幣【へい】神への捧げ物。ぬさ。幣は神などに捧げる帛(絹)という意味で、延喜式には祭祀ごとに幣物として布帛、武器・農具、酒・魚貝・海藻などが規定されているが、幣物の中心となるのは繩・糸・布・木綿などの布帛類。元来自分にとって大事なものを神に捧げていたのであるが、布帛の材料となる繊維がとくに重視され、櫛に木綿や麻を垂らした。やがて布帛を串に挟んだり、後には木に紙垂を垂らす形となり、御幣と称するようになった。(＊12)
- # 12 扁額【へんがく】門戸・室内などにかける細長い額。(＊11)
- # 13 狛犬【こまいぬ】(高麗犬の意) 神社の社頭や社殿の前に据え置かれる一対の獅子に似た獣の像。魔よけのためといい、昔は宮中の門扉・几帳・屏風などの動揺するのをとめるためにも用いた。こま。(＊11)
- # 14 世尊寺流【せそんじりゅう】藤原行成に始まる書風の流れ。行成の建てた世尊寺を、鎌倉時代に出た行能が家名にしたところからの命名。平安時代には藤原伊房・定実・定信などが出、鎌倉時代の経朝により確立。和様で個性に溢れた書として書の道の中心にあり、室町時代まで繁栄を誇った。(＊12)
- # 15 遠藤由晴【えんどうよしはる】 宝暦9(1759)年谷保千丑^{ちうし}の生まれ、長じて遠藤宗五郎由晴と名乗り、吟松齋^{ぎんしょうさい}と号した。幼少から書をよくし、文章詩歌に通じ、後年「谷保案内」を著した。
「谷保案内」は上下2巻からなり、江戸時代の谷保村の様子を七五調で綴った江戸時代末期に寺子屋でもっとも重用された教科書である。(＊4)
- # 16 末寺【まつじ】 本山の支配のもとにある寺。
- # 17 法然【ほうねん】 長承2 - 建暦2.1.25(1133-1212)年) 浄土宗の開祖。諱は源空。父は美作国久米の押領使、漆間時国。夜討で父を亡くして出家、15歳で比叡山に登って源光・皇円らに師事。1150(久安6)遁世して、黒谷別所の叡空のもとで浄土教を学び円頓戒を受けた。南都遊学の後、安元(1175)年に唐の善導の「観経疏」により回心し浄土宗を開く。文治2(1186)年の大原問答で注目され、建久元(1190)年には重源の要請で東大寺で講説、称名念仏が弥陀に選択された唯一の往生行である、との選択本願念仏説を披瀝(専修念仏)。建久9(1198)年に九条兼実の要請によって「選択本願念仏集」を撰述したが、社会的反響の大きさもあって旧仏教から敵視された。元久元(1204)年には延暦寺が、翌年には興福寺が専修念仏禁止を上奏。建永2(1207)年2月に専修念仏禁止令が發布され弟子4名が死刑、法然も土佐に流罪となった(建永法難)。同12月に赦免され摂津勝尾寺に寄寓、建暦元(1211)年11月帰洛を許され、翌年東山大谷の住坊で没した。弟子には幸西・親鸞・証空・隆寛・聖光・長西らがいる。主著「選択本願念仏集」「一枚起請文」。(＊12)
- # 18 出開帳【でかいちょう】本尊など仏像類を他所へ出して公開すること。時候のよい春に行うことが多い。(＊11)
- # 19 神仏分離令【しんぶつぶんりれい】王政復古・祭政一致の理念にもとづいて、奈良時代以来の神仏

習合・神仏混淆を禁止し、神社からの仏教色の排除を命じた、明治初年の一連の行政措置(法令)。慶応 4 (1868) /明治元(1868)年. 3. 17, 神社の別当・社僧に還俗を命じ, 3. 28, 権現などの仏語を神号に用いることや, 神社での仏像・仏具の使用を禁止した(神仏判然令)。これらの法令は近世の儒学・国学の復古思想や排仏思想の高まりを背景とするため, 神職や国学者や地方官の間で廃仏毀釈の行動が激化し, 中央政府が排仏を諫めたにも関わらず多くの寺院が破壊された。(*12)

- #20 廃仏毀釈【はいぶつきしゃく】排仏毀釈とも書く。明治初期の神仏分離令, 神道国教化政策を契機に全国各地で行われた仏教排斥運動。近世の儒学者・国学者の排仏論や儒学経世論, 財政逼迫を背景とした水戸藩などの寺院整理を淵源とする。神職・国学者や地方官によって指導され, 神社の仏教的物事の棄却や, 合併・廃止などによる寺院の削減が行われた。その結果, 排仏を諫める中央政府の布告にも関わらず, 多くの寺院, 仏像・仏具・仏典などが破却された。廃仏毀釈は仏教界に改革を促し, 護法運動や教団近代化運動を惹起した。また, 各地で真宗僧侶や門徒による一揆(大浜騒動・越前真宗護法一揆など)も発生した。 (*12)
- #21 江戸名所図会 江戸時代後期に刊行した江戸の地誌。7 巻 20 冊。長谷川雪旦の挿図も有名。前半 1-3 巻 (10 冊) は 1834 年、残り 4-7 巻は 1836 年に刊行された (全 7 巻 20 冊)。日本橋から始まり、江戸の各町について由来や名所案内を記し、近郊の武蔵野、川崎、大宮、船橋などにも筆が及んでいる。江戸の町についての一級資料である。
- #22 新編武蔵風土記稿 間宮士信らが徳川幕府の命によって編纂した武蔵国の地誌。全部で 265 巻からなり、文化 7(1810)年から文政 1 1 (1828) 年にかけて完成。
- #23 武蔵名勝図会 八王子千人同心出身の植田孟縉(うえだもうしん) が書いた多摩郡 1 2 巻の武蔵野を紹介した本。文永 3(1820)年に完成した。
- #24 法然上人伝記【ほうねんしょうにんでんき】著者未詳。鎌倉時代成立とみられ、現存する最古の法然伝。醍醐寺蔵。全 6 編。このうち 4 編についてはほぼ同じものが「西方指南抄」「拾遺語灯録」「和語灯録」等に収録されている。第 3 編〈三心料簡および法語〉の末尾に悪人正機説が記され、この部分が果して法然の言行と考へうるか否か論議をよんできた。(*12)
- #25 阿弥陀【あみだ】(梵語 Amitaayus は無量寿、Amitaabha は無量光と漢訳)〔仏〕西方にある極楽世界を主宰するという仏。法蔵菩薩として修行していた過去久遠の昔、衆生救済のため四十八願を發し、成就して阿弥陀仏となったという。その第十八願は、念仏を修する衆生は極楽浄土に往生できると説く。浄土宗・浄土真宗などの本尊。阿弥陀仏。阿弥陀如来。略して弥陀。無量寿(仏)。無量光(仏)。(*11)
- #26 如来【によらい】(梵語 tathaagata 多陀阿伽陀) 仏十号(ぶつじゅうごう)の一。仏の尊称。「かくの如く行ける人」、すなわち、修行を完成し、悟りを開いた人の意。のちに、「かくの如く来れる人」、すなわち、真理の世界から衆生救済のために迷界に来た人と解し、如来と訳す。(*11)

出典／参考資料 ([]内は 国立市中央図書館図書記号、()内は公民館図書記号)

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7(1995)年 [10/B1]
- 2) 国立市史 編纂 国立市 昭和63(1988)年～平成4(1992)年 [10/B1]
- 3) 国立歳時記 原田重久 昭和44(1969)年 [10/B1]
- 4) くにたち歴史探訪ガイドブック 改訂版 平成16(2004)年 [10/C6]
- 5) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42(1967)年 [10/B1]
- 6) 日本の神仏の辞典 大島建彦他 大修館 2001年 [R162]
- 7) 日本歴史大系13(東京都の地名) 平凡社 2002年 [R291]
- 8) 国史大辞典13 吉川弘文館 1992年 [R291]
- 9) 日本文物文献目録 法政大学文学部史学研究室 1974年 [R281]
- 10) 日本人名大事典 平凡社 1938年 [R281]
- 11) 広辞苑第6版 三省堂 2008年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 多摩ら／び 2002No.20 スケッチで見る谷保風景 関敏 けやき出版 2002年[02/A5]
- 14) 神社名鑑 神社本庁 1963年 [R175]
- 15) 総合佛教大辞典 法蔵館 2005年 [R180]
- 16) 日本仏教史辞典 今泉淑夫他 吉川弘文館 1999年 [R182]
- 17) くにたちの石造物を歩く 国立市教育委員会 1999年 [10/D8]、(K218)
- 18) 江戸名所図会 市古夏生、鈴木健一 校訂 ちくま学芸文庫 1996年 [01/B5]
江戸名所図会 鈴木宗之、朝倉治彦 校註 角川文庫 昭和42(1967)年 [01/B5]
江戸名所図会 元寸復刻版 石川英輔、田中裕子 評論社 1996年 [01/B5]
巻の三に 谷保天満宮、常盤の清水、菅原道武朝臣旧館の地、仮屋坂、梅香山安楽寺の絵と説明あり。
- 19) 江戸名所図会を読む 川田壽 東京堂出版、1990年 [01/C2]
- 19-1) 続江戸名所図会を読む 川田壽 東京堂出版、1995年 [01/C2]
- 19-2) 近郷散策 江戸名所図を歩く 川田壽 東京堂出版 1997年 [01/C2]
- 20) 谷保天満宮所蔵文書 I 昭和61(1986)年調査 国立市地域史料叢書第9集 (K2)
谷保天満宮所蔵の文書目録の一覧と史料25点について解説を付している。
主な史料は、安楽寺記、津戸三郎為盛系図、谷保天満宮略縁記
- 21) ぶらり日本名作の旅 日本テレビ放送網株式会社 1988年 [10/C2]、(KS910)
山口瞳の「居酒屋兆治」の一部、天神様の由来、おかがら火が紹介されている。
- 22) くにたちの野草いろいろ 国立市教育委員会 1979年 [10/Q7]、(K412)
- 22-1) くにたちみどりの交響楽 国立市教育委員会 1990年 [10/Q7]
- 23) 国立の大木 国立市大木調査報告書 1990年 [10/Q7]、(K472)
- 24) 国立の植生 国立市植生調査報告書 曾根伸典 1980年 [10/Q7]、(K472)
現存する植物群落の保全のための調査報告書
- 25) 記録する会『谷保のむかしをさぐる一天満宮／城山／津戸三郎』 国立市公民館 1983年 [10/B4]
- 26) 日本歴史叢書19 天満宮 竹内秀雄 吉川弘文館 1968年 [-]、(211)
諸国の天満宮として、谷保天満宮は、延期年間(902～922)、菅公の三子道武の創建と伝えている。

- 27) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50(1995)年 [10/B1]
「国立風土記」、「国立歳事記」の一部再録、訂正と新事項が加わった。
- 28) 谷保天満宮物語 原田重久 谷保天満宮社務所 1992年,(2005年改訂9版) [10/D9]
- 29) 多摩の歴史(3) 郷土士刊行会 昭和50(1995)年 [02/B1]、(K291)
- 30) 古書にみる国立
-1 江戸名所図会 上記 19)
-2 武蔵名勝図会 植田孟縉、片山迪夫、慶友社、1993年 P609 [02/C6]
-3 法然上人行状伝記日本絵巻大成 法然上人絵伝 小松茂彦 中央公論 1981年 [72/2]
-4、新編武蔵風土記稿 [02/C6]
- 31) 東京歴史散歩 東京歴史散歩編集委員会 [01/C2]
- 32) 都神社名鑑 下巻 [01/D9]
- 33) 谷保の城山の四季 谷保の城山ふれあいボランティア 平成14(2003)年 [10/Q7]
- 34) 東京湧水探訪 百瀬千秋 けやき出版 1995年 [01/C2]
P66に谷保天満,常磐の清水 P70に矢川,ママ下湧水 紹介記事あり
- 35) 法然上人をめぐる関東武者3 津戸三郎為守 梶村昇 東方出版 2000年 [289/つ]
- 36) わたしたちの町 くにたち 郵政国立研究会/編著 ぎょうせい 1987年 [-]、(291)
- 37) こども風土記 国立むかしむかし 原文:原田重久、監修:水野祐 くにたち中央図書館 1981年 [10/B1]、(K219)
- 38) くにたちに時はながれて 志田次子 自家出版 1987年 [10/Y3]、(KS318)
- 39) 武蔵野歴史地理 第7冊 高橋源一郎編 有峰書店 [Q2/B1]、(291)
城山、板碑 三田氏について記載
- 40) わが町 山口瞳 1968年 新潮社 [10/Y2]
- 41) 近松全集第1巻 「津戸三郎」 近松全集刊行会 緑川亭1985年 岩波書店
元録2年5月 竹本座で上演された浄瑠璃
- 42) わたしたちの国立 社会科副読本改訂委員会 1995年 国立市教育委員会 [10/B1]
- 43) 朝日新聞 2008年8月2日 朝刊 多摩版
- 44) 日本くるま意外史 2004年4月 トヨタ博物館発行 [537]
- 45) 石仏を楽しむ 国立編 獅子宿の碑 石川博司編 1986年 ともしびの会 [D1]
- 46) 国立の生活誌 II 佐藤彦一家の暮らし 国立市教育委員会 1985年 [D1]
- 47) くにたちの年中行事 四季の祈り 秋から冬へ くにたち郷土博物館 2003年 [10/D4]
- 48) 谷保の水車 記録する会 国立市公民館 1986年 [C7]
- 49) わが国初の自動車(タクリー号)「遠乗会」100周年 パンフレット 谷保天満宮、国立観光まちづくり協会 2008年8月発行 [537]

謝意

本資料の作成にあたり、谷保天満宮 権禰宜 菊地 茂 さん より 第1章の谷保天満宮をはじめ、谷保天満宮、津戸三郎為守などについて、貴重な知見と助言、資料の提供を頂きました。深くお礼を申し上げます。